

新刊

□Fink S.: **Pathological and Regenerative Plant Anatomy** 1095 pp. 1999. Gebruder Borntraeger Verlagsbuchhandlung, Berlin. DM 338.00.

植物形態学、植物解剖学は、健全な植物体を基本としている。しかしながら、自然にある植物は必ずしも健全なものとは限らない。虫に食われたり、風雨に痛めつけられたり、病原菌に侵され病気になったりもする。他の生物の侵入と言えば寄生植物もある。ラン科植物の菌根のように他の生物の侵入に始まり進化の結果、見事な共生関係を確立しているものもある。これらの外圧に対し、植物たちは生き延びるためいろいろな工夫をこらしている。

本書は、機械的な刺激、傷、霜、熱、水やミネラルの過不足、大気汚染、ウイルス、細菌、真菌、寄生植物、ネマトーダ、昆虫などあらゆる外圧に対する植物防御機構について植物解剖学の観点からまとめたものである。本書では細胞レベル、組織レベル、器官レベルでの変化を古くから知られている虫瘤などを含め多種多様な例で記述している。最近の知見も網羅している。説明を補足する図、写真も豊富でカラーも多い。また半分以上はオリジナルな図であり著者の意欲が感じられる。引用文献も膨大で300ページ以上にわたっている。

本書は、植物病理学者にとって欠かせない教科書であるのは言うまでもない。この分野は、発生学、生理学とも密接に関連しており、植物発生学、植物生理学を専攻する研究者にも良い教科書となるだろう。さらに、植物の多様な防御機構から、生物の進化も考えさせてくれるおもしろい本でもある。植物の防御機構に関しては近年研究の進捗が著しく分子レベルでの解析も進んでいるが、本書に記載されているような目に見える現象のおもしろさも楽しみたいと思う。(寺林 進)

□小川 潔：日本のタンポポとセイヨウタンポポ 130 pp. 2001. ¥1600 (税別)。どうぶつ社。

永年タンポポの研究をしている著者が、そ

の蓄積された知識をもとにして、在来種と外来種のそれぞれの生活の仕方と、両者の相互関係を詳細に述べたものである。両者の種子生産の仕方、種子の発芽とその生存率、一年を通しての葉の成長の仕方など、それぞれ独自の方法を持ち、それぞれが環境に適応した生活様式を持つことが述べられている。在来種は夏に殆ど葉が無くなり、休眠状態になるのに、外来種は夏や秋に葉の数は減少するものの、一年を通して活動しているなど、両者には大きな違いがある。それ以外にもそれぞれが環境に適応した生活様式を持つことが述べられている。一般に言われるように、セイヨウタンポポがニホンタンポポ駆逐して繁殖しているということだけでなく、セイヨウタンポポの繁栄は、人による環境破壊が大きな原因であることを証明している。また両者のあいだに遺伝子交換が起きているのも、タンポポの今後の推移の重要な問題だとしている。一般の人にとって内容がやや難しいきみがあるけれど、身近な植物なので、ここに書かれている内容は知っておきたいことである。

(山崎 敬)

□Rui-Liang Zhu and May Ling So: **Epiphyllous Liverworts of China (中国産葉上苔類)** Nova Hedwigia Beiheft 121, 418pp. +ii. 2001. J. Cramer, Berlin. ISBN3-443-51043-4 (www.borntraeger-cramer.de) DM190.

この本は、隠花植物の専門誌である「Nova Hedwigia」の別巻として出版されたもので、中国(台湾を含む)から報告されたすべての葉上苔類を扱っている。10科28属168種に及ぶ葉上苔類のそれぞれについて、形態的特徴の記載と近縁種との比較、使用した標本の一覧、生育環境についてのノート、分布が要領よくまとめられているほか、すべての種に対してその特徴をよく示した図が添えられている。中国における葉上苔類の簡単な研究史および形態的特徴の解説にはじめの30頁ほどが費やされており、入門書としても読むことができる。

葉上苔類はその生態的特徴によってまとめ